

原著論文

被災した家族に現れる家族の境界の様相
—災害後における家族レジリエンスを促す看護援助の実践から—

Aspects of family boundaries among disaster-affected families
-From nursing care practice to enhance family resilience-

田井雅子 (Masako Tai)* ¹	池添志乃 (Shino Ikezoe)* ¹
瓜生浩子 (Hiroko Uryu)* ¹	中野綾美 (Ayami Nakano)* ¹
大川貴子 (Takako Okawa)* ²	中山洋子 (Yoko Nakayama)* ³
中村由美子 (Yumiko Nakamura)* ⁴	中平洋子 (Yoko Nakahira)* ⁵
畠山卓也 (Takuya Hatakeyama)* ⁶	森下幸子 (Sachiko Morishita)* ¹
坂元綾 (Aya Sakamoto)* ¹	永井真寿美 (Masumi Nagai)* ¹
野嶋佐由美 (Sayumi Nojima)* ¹	

要 約

本研究の目的は、看護者が行なった家族レジリエンスを促す看護援助を家族の境界の視点から分析することによって、被災家族にどのような家族の境界の様相が現れているのかを明らかにすることである。被災地において家族への支援活動を行った看護師15名を対象に面接調査を行い、質的に分析した。結果として、被災した家族に現れた家族の境界の様相は、【日常性をめぐる家族の境界】【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】【役割葛藤にまつわる家族の境界】【社会に対する開放性による家族の境界】【安全と危険性をめぐる家族の境界】で表された。看護者が、被災した家族の境界がどの様相を呈しているのかを、災害後の時間経過に縛られずに捉えること、家族の境界の様相に応じた援助を行なう視点を持つことが、家族レジリエンスを促す看護援助において重要であることが示唆された。

Abstract

The purpose of this study is to delineate aspects of boundaries in a family who have suffered a disaster found in family resilience enhancement nursing care practice. Semi-structured interviews were conducted with 15 nurses who provided support care for families in disaster-affected areas. Qualitative descriptive method was used for data analysis. The results revealed 5 aspects of boundaries particular to disaster-affected families: "performance of everyday routine", "changes in family relationship patterns and structure", "role conflict among family members", "level of willingness to open up", "self-assessed level of safety and danger". In nursing care for family resilience enhancement, it is important for nurses to understand these aspects among disaster-affected families regardless of lapse of time after the disaster, and it is essential to provide care according to these aspects.

キーワード：家族レジリエンス 家族の境界 災害 家族看護

*¹高知県立大学看護学部

*²福島県立医科大学看護学部

*³元高知県立大学看護学研究科

*⁴文京学院大学保健医療技術学部

*⁵愛媛県立医療技術大学保健科学部

*⁶駒沢女子大学看護学部

I. はじめに

ひとたび災害が起きると、生活物資の不足や環境の変化など人々の生活は多方面に影響を受け、個人－家族－地域のシステムは脆弱化する。この脆弱化は家族や地域の健康状態を悪化させたり、潜在していた健康課題を表面化させたりすることにもつながる。また、行方不明者の家族のように、あいまいな喪失 (Boss, 2006) による苦痛を抱えた家族や、家族の間でも体験の受け止め方に温度差があることで、家族の関係性に生じる歪みが家族システムの不安定さを招く。このような災害によって脆弱になったシステムを回復するために注目されるのが、回復を促進する力としてのレジリエンスである。

災害の予防力に災害を乗り越える力を加えた総合的な力としての災害レジリエンスを高める必要性が指摘されており (林, 2016)、災害時に危機に晒された家族の回復力と予備力を高める支援への方策として、家族レジリエンスの概念が有効であることが報告されている (河原ら, 2014)。そして震災後のあいまいな喪失を体験している家族や、発災時に地域住民との関わりでストレスを感じている障がい児の親の家族レジリエンスを高める支援に関する報告もみられる (瀬藤ら, 2015; 細谷, 2017)。このことから家族が災害による苦難を乗り越え、家族の生活の営みを家族の力で推進できるように家族レジリエンスを発動し、脆弱化した家族システムの再生を進めることが必要といえる。

家族システムは階層性があると共に、外的・内的な境界をもつ。家族の境界について堀 (2013) は、家族という範囲を規定する境界のようなもので、個人の主観的な認識としての側面や、社会の常識や歴史、制度などにおいて現れる側面、他者との相互作用の中で立ち現れる側面など、多様な位相のなかで生成するものと述べている。

災害は物理的にも主観的にも家族の境界に変容をもたらす。家族の境界のあいまいさが長期に渡り持続することは、家族のストレスを増大し、家族の機能不全を引き起こす (Boss, 1984)。そのため、家族システム再生の観点から家族支援を検討するには、家族の境界の様相に着目し、家族を理解することが重要と考える。

我々は家族レジリエンスを「家族が災害およびその体験する困難で脅威的な状況、逆境に直面したときに、それに立ち向かい、乗り越え、状況に適応するとともに、それを糧として再び前進していく力」と定義し、家族レジリエンスを促す看護援助について、被災地で家族支援にあたった看護者に対して面接調査を実施し、災害における家族レジリエンスを促す看護援助を抽出した。そして家族看護や災害看護に関する文献検討の結果と、被災家族のモデル事例を基に行なったグループインタビューから抽出した家族支援を統合して、「災害後における家族レジリエンスを促す7つの看護アプローチ」として報告した (野嶋ら, 2018)。本稿は、この野嶋ら (2018) の研究の一部であり、被災した家族に現れた家族の境界の様相について報告するものである。

II. 研究の目的

本研究の目的は、被災した家族を支援する看護者が行なった家族レジリエンスを促す看護援助を家族の境界の視点から分析することで、被災家族にどのような家族の境界の様相が現れているのかを明らかにすることである。

III. 研究方法

研究デザインは質的記述的研究である。

1. 用語の定義

本研究では、家族の境界を、家族であることを規定するものであり、物理的、実体的なものに限定せず、個人の主観や家族の文化、家族を取り巻く環境、社会との相互作用の影響を受け生成する流動的なものとする。

2. 研究協力者

研究協力者は東日本大震災、広島県の豪雨災害などの被災地において支援活動を行った看護者とした。

3. データ収集方法

看護者が被災地での支援活動において出会っ

た家族が直面していた逆境についてどのように捉え、家族レジリエンスを促進するために、家族をシステムとして捉え、どのような看護援助を実践したのかについてインタビューを実施した。研究期間は2014年～2016年であった。

4. データ分析方法

インタビュー内容の逐語録から看護者が行った家族レジリエンスを促進する看護援助について意図を含めて抽出し、その意味する内容をテーマで表した。次に看護援助のテーマの中から家族の境界に視点をおいたテーマを抽出し、抽出したテーマの類似性や相違性を検討し、看護援助のサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。そしてカテゴリーより看護者の看護援助は、被災家族をどのような家族と規定して行なわれているのか検討し、家族の境界の様相として表した。

5. 倫理的配慮

研究協力者に対して、研究の主旨や目的、研究の参加における自由意思の保障、協力の撤回や中断の自由、プライバシーの保護、研究結果の公表の仕方、研究協力による利益と不利益について文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。研究は高知県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結 果

1. 研究協力者の概要

家族レジリエンスを促進する看護援助についてインタビューに協力した看護者は23名で、うち3名は2回インタビューに協力した。インタビューごとにcase番号をふり、26caseとなった。家族の境界に視点をおいた看護援助を語った看護者は15名(17case)で、内訳は看護師12名(13case、災害支援ナースを含む)、保健師1名(2case)、助産師1名、養護教諭1名であり、年代は30歳代～60歳代、看護職の経験は13年～35年であった。支援の時期は被災直後から仮設住宅からの移転後まで、支援の場は自宅や避難所、仮設住宅と様々であった。

2. 家族の境界の様相と家族レジリエンスを促す看護援助について

分析の結果、家族の境界に視点をおいた家族レジリエンスを促す看護援助として、〔家族の日常性を維持することで脆弱化した家族の生活を護る〕〔密着と遊離、摩擦を繰り返しながら、家族が新たな関係性を再構築することを支える〕〔家族役割を相補しつつ、家族の力で役割行動が取れるよう促す〕〔家族が新たに地域とつながり、地域の中に家族を位置づけられるようにする〕〔不確かな状況の中であるからこそ、確かな情報と安全な空間を提供して家族の境界の拡散を防ぐ〕のカテゴリーが得られた。これらのカテゴリーから現れた家族の境界の様相は、【日常性をめぐる家族の境界】【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】【役割葛藤にまつわる家族の境界】【社会に対する開放性による家族の境界】【安全と危険性をめぐる家族の境界】であった(表1)。

家族の境界の様相を【 】, 家族レジリエンスを促す看護援助のカテゴリーを〔 〕、サブカテゴリーを〈 〉、研究協力者の語りを「 」で示す。

1) 【日常性をめぐる家族の境界】の様相とそこでの家族レジリエンスを促す看護援助

【日常性をめぐる家族の境界】は、家族の習慣や生活空間、セルフケアなど固有の日常生活の積み重ねから成っている家族の日常性が災害によって崩れ、家族が非日常の時空間に身をおき生活しなければならなくなることで、日常性と非日常性をめぐり現れる家族の境界である。

この様相における看護援助〔家族の日常性を維持することで脆弱化した家族の生活を護る〕とは、災害が家族の日常を停滞させたり奪ったりすることで、家族の機能と家族の境界の脆弱化が起こることに対して、脆弱な家族の境界が崩壊へと進まぬよう、家族の生活力を見極め、今この場でも可能な日常性を見つけることで家族の生活を護り、家族の境界を保つ援助である。

〈被災により余儀なく縮小した家族形態の中の家族の生活力を把握する〉では、「離れてしまったがゆえに、元に戻らないっていつか。年寄り年寄り。若い夫婦は若い夫婦。老夫婦は前はもっとサポートが厚かったけれども、それ

がちよっと手薄になった。元の生活を、どんなふうに住生活してたのか、その人らしいっていうのは、どういうことだったらできるのかって、どういうことは大変なのっていうのをちよっと聞きながら。(case3)」のように、被災によって家族が離れて生活をする中で、家族の境界が変化した家族への援助を語っていた。

〈非日常の中であるからこそ、可能な限りの日常性を取り入れて家族としての生活基盤を整える〉では、「本当に当たり前前の方が当たり前前できるようにしてあげる、例えば、ごみ箱が一杯になる前に、ちゃんとごみが捨ててあるとか、やっぱり快適な気温とか湿度とか、そういう当たり前前。(case25)」と語った。また、糖尿病であることを周囲の人に隠していることを知り、「そういった思いを持っているんだなっていうところが、すごくあって。じゃあ、どうすればいいのってことで、インスリンの打つ時間やどこに行けばいいよとかって言ったりしたような気がしますね。で、結局、トイレに隠れて、今までやってたっていうところも尊重してあげ

て。(case14)」と語った。このように、これまでの「日常生活」や「プライバシーや秘密」などを守り、家族の境界を保護する関りを行っていた。

2) 【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】の様相とそこでの家族レジリエンスを促す看護援助

【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】は、災害によって個人の心身が脅かされ、それが家族の関係性へと波及し、また家族の関係性の揺らぎが個人の不安定さを引き起こすという情緒から関係性、関係性から情緒へと家族が共振する状態の中で現れる家族の境界である。

この様相における看護援助〔密着と遊離、摩擦を繰り返しながら、家族が新たな関係性を再構築することを支える〕とは、心理的にも物理的にも被災前のような距離が保てなくなった家族に対して、家族システムが安定化するよう、家族の新たな距離感の模索を支えて関係性の再

表1 被災家族に現れる家族の境界の様相と家族レジリエンスを促す看護援助

家族の境界の様相	家族レジリエンスを促す看護援助	
	カテゴリー	サブカテゴリー
日常性をめぐる家族の境界	家族の日常性を維持することで脆弱化した家族の生活を護る	<ul style="list-style-type: none"> 被災により余儀なく縮小した家族形態の中の家族の生活力を把握する 非日常の中であるからこそ、可能な限りの日常性を取り入れて家族としての生活基盤を整える
情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界	密着と遊離、摩擦を繰り返しながら、家族が新たな関係性を再構築することを支える	<ul style="list-style-type: none"> 家族が表出する揺れ動く感情をありのままに受け止める 不安・緊張が共振して密着し過ぎる家族の距離をほぐす 情緒的なつながりへの安心感を通して、家族の関係性を強める 家族が共有する価値を尊重する
役割葛藤にまつわる家族の境界	家族役割を相補しつつ、家族の力で役割行動が取れるよう促す	<ul style="list-style-type: none"> 家族の役割期待を把握し、役割移行する力を引き出す 家族の力の限界を見極め、限界を超える頑張りには歯止めをかける 被災がもたらした変化に対し、家族の力で対処できるよう後押しする
社会に対する開放性による家族の境界	家族が新たに地域とつながり、地域の中に家族を位置づけられるようにする	<ul style="list-style-type: none"> 外部との交流を閉ざそうとする家族を、着かず離れずの距離をとりつつ社会とつなぐ 同じ境遇の家族をつなぎ家族の境界の開放性を維持させる 被災により得られなくなったサポートを、地域とのつながりの拡大によって補う 被災家族をも包摂できる地域作りへの参加を促す
安全と危険性をめぐる家族の境界	不確かな状況の中であるからこそ、確かな情報と安全な空間を提供して家族の境界の拡散を防ぐ	<ul style="list-style-type: none"> 安心して居ることができる場や空間をつくり、家族の砦を守る 確かな情報を届けることで家族に安心をもたらす

構築を促すことで家族の境界を維持する援助である。

〈家族が表出する揺れ動く感情をありのままに受け止める〉では、「日頃から心がけているのは、わかりやすいように。あとは、穏やかに。で、不安があるのであれば、いつでもおいでくださいっていうのは、やはり。なので、やはり保証ですよ、その保証をして安心していただいて、あとは情報、ある情報はお伝えする。(case15)」のように、家族の不安が高いからこそ穏やかな対応によって、揺らぐ家族の境界を持ち堪えさせていた。

〈不安・緊張が共振して密着し過ぎる家族の距離をほぐす〉では、「最初に10分間だけ散歩するっていうことをやりましたね。家の周りをですね。最初、10分間さえも出してくれなかった家族が、今日はよく散歩ができたなっていうふうにするようになってきましたよね。(case5)」のように、震災後に強固になった家族の依存関係をゆるめて、柔軟性のある家族の境界を取り戻せるようにしていた。

〈情緒的なつながりへの安心感を通して、家族の関係性を強める〉では、「家族っていうか、自分の愛すべき人を大事にしてたっていう価値が、この人にとってすごく大きかったんだなって。(子どもたちとの)縁を切ったと言っても、電話がつながったときの本人の表情だったり、何かまだ行けるぞみたいな。まだ、この関係性って作り直せるんじゃないかっていうふうな、どっか勘が働いたというか。(case19)」と、災害後の今だからこそ家族の関係性が力になると考え、疎遠になっていた家族の境界の再生に働きかけていた。

〈家族が共有する価値を尊重する〉では、「家の中にあるもの、飾ってあるものとか、ヒントがいっぱいありますよね。家自体も、その人もそうですし、家の代々続く庭とか、土地を守ってきた、その家族の家主のプライドみたいなものもあると思いますし。そういったものに注目して、もとに戻れるためにはどうしたらいいかって。(case6)」と、被災前から家族が大事にしてきたものを維持することが、家族の関係性を強め、情緒を安定させ、家族の境界の支えとなっていた。

3) 【役割葛藤にまつわる家族の境界】の様相とそこでの家族レジリエンスを促す看護援助

【役割葛藤にまつわる家族の境界】は、災害が家族の構成や生活を一変することに伴って、家族が役割の代行や移行を行なう中、家族員の役割期待と役割遂行がずれることで生じる役割葛藤をめぐり現れる家族の境界である。

この様相における看護援助〔家族役割を相補しつつ、家族の力で役割行動が取れるよう促す〕とは、被災後に麻痺や停滞した家族の機能を、家族相互に補い、家族の力で立ち上がり、家族が共倒れせず役割調整が進むことで、家族の境界を強める援助である。

〈家族の役割期待を把握し、役割移行する力を引き出す〉では、「パターンそのものは、こちらから提案してみるっていうことですかね。こういう事があるので、ちょっとやってみましょうかっていうふうには提案をして、家族も本人も同意してくれるっていう形ですかね。(case1)」、「お掃除の人来て、やらなくていいですからって言われるけど、やっぱりさ、働き者のばあちゃん、何にもしないでいられないから。ありがとうって言い続けるのも、しんどいんだなと思って。だから、それからは、お願いしますって言って、ばあちゃんにだっこ、おんぶしてもらって、うちの子。で、その間に、もう仕事はかどりましてって言って、お互いさまだからとかって言って。(case12)」のように、家族の役割が機能することが家族の境界の再生に重要であることを語った。

〈家族の力の限界を見極め、限界を超える頑張りには歯止めをかける〉では、「認知症のお母さんが、婿のくせになって罵倒し、手を上げることがわかったときに、そのお婿さんに、もう限界じゃないとか、これから、どうするかって考えていなくていいけど、もうここまで頑張ったんだから、いいんじゃないって、労いの言葉をかけられる、私たちが。どれだけ救いになるんだろうって思うんですよね。(case4)」と語り、役割荷重から崩れそうになる家族の境界に対して、役割調整を行って境界を護っていた。

〈被災がもたらした変化に対し、家族の力で対処できるよう後押しする〉では、「もともと住ん

でいた古いお家があるので。彼女たちの家族が住めるように整えてはくれてあったんで。そこで週末だけでもそこに行こうって、最近では促してはいるんです。自立していかないとねっていうところは、何回も最近では言ってるんですけど。(case1)」と、家族が被災前の家族形態に戻り、家族の役割が取れるよう促すことで家族の境界の再生を促していた。

4) 【社会に対する開放性による家族の境界】の様相とそこでの家族レジリエンスを促す看護援助

【社会に対する開放性による家族の境界】は、災害によって脆弱になった家族が、社会システムに対して家族の境界の開放性を低下させることで家族システムを護ろうとしたり、家族の境界の開放性の柔軟さを高めて脆さから立ち上がろうとしたりと、社会に対する境界の開放性を調整する中で現れる家族の境界である。

この様相における看護援助〔家族が新たに地域とつながり、地域の中に家族を位置づけられるようにする〕とは、地域システムの亀裂や家族が災害前に所属していた地域や社会との分断が起きることによって、家族が境界の閉鎖性を高めて護りを強める状態から、地域と家族をつなぎ、地域システムに対して境界の開放性と透過性を高める状態に移行することを支える援助である。

〈外部との交流を閉ざそうとする家族を、着かず離れずの距離をとりつつ社会とつなぐ〉では、「ご主人は将棋が好きだから、とにかく将棋できる人を行かせるんです。1回は行ってもらって、後、次の日はこっちへ呼んできて、ご主人にここで将棋をしてもらって、奥さんの自由な時間を作るっていうか。(case7)」と語り、徐々に家族の生活範囲を拡大し、社会と自然につながれるようにすることで、家族の境界の開放性を高めていた。

〈同じ境遇の家族をつなぎ家族の境界の開放性を維持させる〉では、「お茶っこ飲み会に来てても、そこでいろんなこと言うんですよ。で、『あ、そうだね』とか、『そんなことで困ってるのか』とかって、全然他愛のない会話の中で、遺族の方たちっていうのは、そこから一つの言葉を、

自分の中にすっと落ちてくる言葉って、だれかが言ってくれるわけですよ。それを宝、灯火のように心の中に置いて、また次の月来るとかっていうの。だから、集まっているんだと思うんですよ。(case4)」と、遺族が心を開ける他の家族とつながることで、閉じがちな家族の境界が緩やかに開かれていく様子を語った。

〈被災により得られなくなったサポートを、地域とのつながりの拡大によって補う〉では、「彼女がどう伝えていいかわからないですよ、自分の状況を。なので、その支援は、結構最初のころにしてみました。それは、もともとこっちの先生と私たちも彼女がいる前からコンタクトは取っていたので、最初にご近所のクリニックは挨拶回りをしたので、何かあったらよろしくお願いしますっていうご挨拶はしてたので。(case20)」と、家族が新たなネットワークに安心してつながれるよう橋渡しをすることで、家族の境界の開放性を維持していた。

〈被災家族をも包摂できる地域作りへの参加を促す〉では、「いいんじゃない、遠慮してればとかって言うと、『じゃ、しなくてもいいの?』って言うから、自分の考えじゃないの、遠慮してどうするのって、未来につながるんだけどとかって言ってる。ここに来て、幸せに暮らしてるかって、そうじゃなくて、内心はね。だけど、この場で自分をさらけ出して、私みたいなのに聞かれたり言われたりしながら、また来月会いましようみたいにしていける。それが、私がやってること。(case21)」と、被災地において広がる住民間の遠慮やためらいから閉じがちな家族の境界について語った。

5) 【安全と危険性をめぐる家族の境界】の様相とそこでの家族レジリエンスを促す看護援助

【安全と危険性をめぐる家族の境界】は、災害により家族は不確かな状況、あいまいな状況の只中に身をおかざるを得ず、家族の生命や生活の安全性は脅かされ、緊張や不安が増強するといった、安全と危険性の狭間において現れる家族の境界を表す。

この様相における看護援助〔不確かな状況の中であるからこそ、確かな情報と安全な空間を提供して家族の境界の拡散を防ぐ〕とは、被災

直後は情報網が寸断され、得られた情報も錯綜し、正誤の判断がつかねる事態からの確かな情報を手に入れることが困難になるため、確かさと安全を提供し、家族の脆弱な境界を維持できるように援助することである。

〈安心して居ることができる場や空間をつくり、家族の砦を守る〉では、「周りに知られたいなかったってということだけ、すごくはっきり言いましたので。あ、そうかって。だったら、今まであんな広いところで、話聞かれても話せなかったんだなって、何となく理解できたので。でも、そういった診療室型に移行したことは、次の医療班にも引き継ぎはしていくので、困ったら、ここに来て話是可以するよって言って、安心はしてもらいましたね。(case14)」と語り、危険性の回避から必然的に閉じてしまう家族の境界を受け入れつつ、家族の境界が開かれるようにしていた。

〈確かな情報を届けることで家族に安心をもたらす〉では、「現場要請のときに、家族の方がいらっちゃって、それは、ただ、いつもどおりですよ。通常の看護とフライトナース業務としてやっているような状況を。例えば安寧の言葉を声かけるだとか、今、状況こうだけれども、病院ですぐに治療するので、心配要らないですよかっていう、状況をお話するだけなので。特別に災害だからこれをしたってということではなくて、いつもの看護を災害の状況の中で、いかに、いつもどおりできるかっていうところが、すごく重要なっていう気が日ごろからあって。(case15)」と、通常と変わらぬ態度で対応することで、あいまいな状況に脅かされ揺らぐ家族の境界を支えることを語った。

V. 考 察

災害後の家族レジリエンスを促す看護援助から捉えた家族の境界の様相について、全体像を説明したあと、家族レジリエンスの発現を促す地盤作り、新たな家族サブシステムの形成、家族の上位システムとの相互性の観点から、家族レジリエンスにおける家族の境界の様相を考察する。

1. 被災家族の家族レジリエンスを促す看護援助と家族の境界の様相の全体像

災害後の家族が家族レジリエンスを発動できるように促す看護援助において、看護者は家族の境界を5つの様相から捉えて看護援助を行っていると考えることができた。

まず、災害がもたらす不確かな状況、日常生活の突然の分断により、【安全と危険性をめぐる家族の境界】【日常性をめぐる家族の境界】が露になっていた。そこで看護者は〔不確かな状況の中であるからこそ、確かな情報と安全な空間を提供して家族の境界の拡散を防ぐ〕〔家族の日常性を維持することで脆弱化した家族の生活を護る〕援助を行なって、家族の境界を保護し、家族レジリエンスの発現を促す地盤を作ろうとしていた。そして、家族が恐怖や不安にのまれながらも、生活と健康を維持するために生活の場や必要な物資、資源を手に入れるべく奮闘する中で、【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】【役割葛藤にまつわる家族の境界】が現れていた。これらの境界の揺らぎに対して看護者は、〔密着と遊離、摩擦を繰り返しながら、家族が新たな関係性を再構築することを支える〕〔家族役割を相補しつつ、家族の力で役割行動が取れるよう促す〕援助を行い、家族システムとサブシステムの境界を時には強固に、時には解すことで、家族の境界が崩れず維持できるようにしていた。その上で【社会に対する開放性による家族の境界】に着目し、〔家族が新たに地域とつながり、地域の中に家族を位置づけられるようにする〕援助を通して、上位システムである社会と家族をつなぎながら、家族の境界の柔軟な開放性を取り戻させ、さらなる家族レジリエンスの獲得と発揮を促していた。

2. 家族レジリエンスの発現を促す地盤作りに関連する家族の境界の様相

災害による予断を許さない混乱した状況、家族の生死や健康状態の確認ができないあいまいさ、未来に対する信頼の喪失など、家族が急速に脅かされる状況において、【安全と危険性をめぐる家族の境界】が立ち現れていた。この様相では、少しでも早期に危険性から脱し安全を得ようと、確かな情報を求め奔走する家族がいる

一方、茫然自失の状態から危険性を回避する行動が起こせず停滞する家族もいた。

このように安全に対する不確かさと曖昧さの高い状況下で、【安全と危険性をめぐる家族の境界】の脆さが現れた家族が、家族レジリエンスを発動できるようになるためには、確かさの手応え、危険性を回避し安全であると知覚できる情報や資源の手掛かりを得る必要がある。近年のソーシャルネットワークは共助の力となり、様々な情報を早期に得る手段として有効に活用されている。一方で、不確実な情報の拡散や故意に歪められた情報によって、さらなる害を被る場合もある。情報を得る多様な手段をもたない家族や孤立した家族にとっては、不確実な情報でさえも届かず、安全を得ることが難しい。また、刻々と更新される情報によっても、安心したり、怒りを感じたりと家族は処理の追いつかない感情に翻弄され、家族の境界は揺らぎ危機状態に陥る可能性が高まる。そのため、心理的に動揺した家族、身体的に消耗している家族に、必要な情報を絞り、的確に届く言葉を選び、端的に明瞭に伝えることで、家族の境界を保護する必要がある。

災害時の急性期において、看護職は安全・安心の確保や、緊急時の医療体制の整備、医療提供を行う役割と機能を担っている（岩村，2014）。また、災害を含む健康危機においては健康弱者の安全・安心な生活の確保を優先しながらも、個人の価値観を認め配慮を行なう必要がある（岩村，2010）。本研究からも、緊急性が高く混乱した状況の中であるからこそ、看護者は生活や医療にまつわる確実な情報、確実な医療技術を家族に届けることを優先して積み重ね、家族を尊重する姿勢を示して家族の砦を守り、安全と危険性をめぐり揺らぐ家族の境界を保護して家族レジリエンス発現の地盤作りをしていた。

加えて、日常性の分断は不確かな感覚に拍車をかけ、【日常性をめぐる家族の境界】を脅かしていた。被害や危険性が甚大な場合、家族は生活する場を転々と移動しなければならず、非日常の空間や時間に身をおき続ける場合が出てくる。家族員や住居の喪失により、家族としての歴史や時間が寸断された感覚にも陥る。家族の生活の営みは奪われ、家族の習慣や大切にしてい

きた家族の価値をも手放さざるを得なくなる。また日常の営みが円滑に進まないことでの日々の生活ストレスも無視できない。つまり家族の日常性が非日常性へと予期せずして転換するため、【日常性をめぐる家族の境界】は必然的に脆くなる。

このような脆弱化した【日常性をめぐる家族の境界】に対して、看護者は新たな生活の中で家族なりの日常性を築くことを重視して根気強く支援を続けていた。見知った人や見慣れた物、些細な日常の習慣の一部でも家族の生活に取り込めることを見つけ出すことや、家族の価値を知って尊重することが、家族の歴史をつなぎ時間を前に進める意味をもち家族の境界を保護するために重要であった。金（2015）は災害後の住民は自らのレジリエンスによって回復すること、日々の生活ストレスの軽減と、相手の声の届く範囲にいて耳を傾ける支援の重要性を述べている。災害時において家族の日常性を補うことに着目し、家族の声に耳を傾け、家族としての日常性を感じ取れることを援助し、日々のストレスを低減することが、家族の境界を再生・強化して家族レジリエンスを引き出すことにつながると考える。

3. 新たな家族のサブシステムの形成に関連する家族の境界の様相

家族システムは構造と機能、発達の3側面で表される（吉川，1993）。中でも【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】は家族システムの構造の変化に、【役割葛藤にまつわる家族の境界】は機能の変化に関連すると考えられる。

まず構造の変化については、災害によって家族は自宅や避難所、復興住宅など居住地を変えながら離れて生活をするようになったり、別世帯で暮らしていた親子が同居を始めることになったりと、家族の縮小や拡大により新たなサブシステムが作られ、家族システムの複雑さが生じ、【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】の脆さが現れる。そこで従来の家族役割を遂行しようとしても、うまく機能せず役割葛藤が起き、【役割葛藤にまつわる家族の境界】が揺るがされている。システム内の変

化がシステムの許容範囲を超えると、家族システムには緊張状態がもたらされる(遊佐, 1984)ため、災害によって家族の情緒的な揺らぎや葛藤が起こると、家族のバランスは乱れ、家族の境界が揺らぎ、システムの保全が危うくなる。そこで家族はシステムの秩序と安定を目指し、家族の境界の揺らぎに耐えながら家族レジリエンスを発動していかねばならない。

また家族の情緒的反応は、被災による恐怖や不安、家族員が無事であったことへの安堵など多彩で、否定的な感情にも肯定的な感情にも振幅が大きい。あいまいな喪失を体験している家族の場合は、喪失の受け止め方が家族の中でも一人ひとり異なるために、コミュニケーションがとりにくくなり、関係性にも影響する(瀬藤ら, 2015)。このような家族の情緒的反応は家族の相互依存の状態を生んだり、家族の親密さを弱めたりなど、家族の関係性のバランスを崩すことにもつながりかねない。

家族の距離の密着は家族の凝集性を高めるため、危機状態に耐え乗り越える力としてレジリエンスの発揮に効果的に作用する反面、密着し過ぎた距離が家族の中に摩擦や関係性の膠着を引き起こすと、システムは機能せず、家族レジリエンスの発揮を妨げることもなる。一方、家族の距離が遊離すると、家族としてのレジリエンスの発動が弱まり、家族システムの不安定さも持続する。

このように災害後の家族は、物理的にも心理的にも日常とは異なる緊張を孕んだ関係性にあるため、家族システムの境界もサブシステムの境界もより脆弱になりやすい。平時の家族の関係性がすでに脆弱であった場合は、なおさらに家族の境界が崩れてしまうリスクが高くなる。そのため、看護者は被災後の家族が関係性の揺らぎを繰り返すことを受け入れ、【情緒的揺らぎと関係性の揺らぎが交錯する家族の境界】【役割葛藤にまつわる家族の境界】を捉えて支援する必要がある。そして家族がシステム内の緊張状態を和らげる方向へと舵を切り、安定へと向かえるように、家族の新たな関係性の構築や役割の移行を支援することが重要である。家族システムは各レベルで分化と統合、再生を繰り返すことでシステムとしての存在を維持する発達

の側面を持つ(吉川, 1993)。被災という状況下においても、家族の境界の揺らぎを分化、統合、再生を行なう家族の発達の側面から捉えて、家族レジリエンスを促進する看護援助を行なう必要がある。

4. 上位システムとの相互性に関連する家族の境界の様相

人間は開放システムであり、環境システムと情報、物質エネルギーを交換して無秩序から高度な秩序へ、混沌から組織立った状態へと発展できる(遊佐, 1984)。中平(2016)は家族と社会の間の境界膜が「適度な透過度を持って機能することによって、情報、物質、エネルギーの交換が行なわれ、家族は上位システムである社会の中で存続することが可能になる」と述べている。

【社会に対する開放性による家族の境界】は、家族が開放システムであり、社会のサブシステムとして社会から災害後に立ち上がる力を得ること、また社会に対して家族が働きかけることによって、社会の力を高めること、そのようにして家族と社会がエネルギーを交換することで生成する境界であり、この境界の適度な開放性が保たれることを通じて家族レジリエンスが引き出されていた。

細谷ら(2019)は発達障害児の親が、災害時に無理解者を認容したり、無理解者から積極的に離れることで困難な体験を乗り越え、分かってくれる人を見つけ、他の親子の役に立ちたいと思うようになり、地域とのつながりを築くといったレジリエンスを発揮していることを明らかにしている。家族の境界が社会に対して閉鎖的になることは、家族システムを護るためにそうせざるを得なかった面がある。そのような家族の境界に対して、看護者は無理に押し開けようとせず、付かず離れずの態度で家族との接点を持ち続け、馴染みの人や場とつないで、適度な境界の開放性を保てるように促して、家族が社会の中に位置づくことを支えていた。

Zolli(2013)は集団のレジリエンスについて、いざというときに協力し合う人間力や、深い信頼に根ざしたインフォーマルなネットワークが重要であることを述べている。レジリエントな

家族は個人、家族、コミュニティのサポートネットワークをもっており (Black & Lobo, 2008)、家族レジリエンスは人と人との繋がり、家族や地域との関係性の中で立ち上がってくる (得津, 2012)。災害はサポートネットワークの機能の低下や不全を引き起こすがゆえに、家族の境界の開放性に応じて、インフォーマルな関係、体験を共有できる人との関係を築く支援を行い、家族レジリエンスの発動を促すことが重要である。

さらに、金 (2015) は地域としてのレジリエンスが出てくるのが、災害以前に地域で見逃されていた課題に対しても、より確かな対応ができること、地域としてのレジリエンスを引き出すことが災害支援の目標になりうることを述べている。つまり、脆弱な家族を包摂できる社会、インフォーマルな関係が機能する社会を構築することが、下位システムの家族の境界の開放性を支えることになる。このように家族の境界が社会に対して柔軟な開放性を保ち、家族レジリエンスと社会のレジリエンスの相互作用が生み出されることが、家族レジリエンスの発揮にとって重要といえる。

5. 本研究の限界と課題

本研究の研究協力者が支援を行なった家族は、自然災害の直後から数年後までと経過も幅広く、若い世代の家族から高齢者家族までと多様な家族形態であった。そのため本研究の結果は、被災後の様々な回復過程にある家族への支援において家族の境界の様相を捉えることに活用できると考える。一方、被災前の家族の境界の柔軟さや脆弱さが、被災後に現れる家族の境界にどのように影響するのかは明らかにできていない。今後は子どものいる家族、高齢者夫婦の家族、障がい者のいる家族など、家族の特性にも焦点を当てて家族の境界の様相を明らかにすることや、自然災害以外の災害に遭われた家族における家族の境界の様相、家族の境界に影響する要因についても検討し、家族の境界の様相に着目した看護援助を発展させることが課題である。

VI. おわりに

災害は家族に多大な影響を及ぼし、被災直後

より家族の境界を脅かす。さらに家族システムの再形成に取り組む過程では、日々の変化によるストレスも加わるため、家族の境界には常に変化や揺らぎが起きている。そのような家族の境界の変化や変容を通して家族システムとして機能するためには、家族レジリエンスの発動が重要である。

災害によって家族の境界に生じる脆さも、家族により様々であるし、家族の境界の再形成に要する時間経過も長短があり、一概には語れない。そのため今まさにどのような家族の境界が生成しているのかを、災害後の時間経過に縛られずに捉え、立ち現れた家族の境界に応じた看護援助を行なう視点を持つことが、被災家族の家族レジリエンスを促す看護援助において重要と考える。

謝辞

本研究にご協力くださいました研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究はJSPS 科研費26253099の助成を受けて行なったものであり、本研究において申告すべき利益相反事項はない。

<引用文献>

- Black, K., Lobo, M. (2008). A Conceptual Review of Family Resilience Factors. *Journal of Family Nursing*, 14(1), 33-55.
- Boss, P., Greenberg, J. (1984). Family Boundary Ambiguity: A New Variable in Family Stress Theory, *Family Process*, 23(4), 535-546.
- Boss, P. (2006) / 中島聡美, 石井千賀子 (2015). あいまいな喪失とトラウマからの回復家族とコミュニティのレジリエンス, 5-13. 東京都: 誠信書房.
- 林春男 (2016). 災害レジリエンスと防災科学技術. *京都大学防災研究所年報*, 59(A), 34-45.
- 細谷紀子, 石丸美奈, 宮崎美砂子 (2017). 発災時において地域住民との関係が発達障がい児と家族にもたらす影響. *千葉看護学会会誌*, 23(1), 21-31.
- 細谷紀子, 石丸美奈, 宮崎美砂子 (2019). 災害時に支えとなり得る地域との繋がりを築いていくための支援の検討 (第2報) - 発達障害児

- の親の地域社会生活におけるレジリエンス－
千葉看護学会会誌, 24(2), 43-53.
- 堀聡子 (2013). 子育て支援の新展開と家族の境界:「子育てひろば」をめぐる実践に関する社会学的考察. 東京女子大学大学院人間科学研究科博士論文.
- 岩村龍子 (2010). 健康危機における倫理的課題と看護職の役割. 岐阜県立看護大学紀要, 10(2), 59-66.
- 岩村龍子 (2014). 災害対応における看護職が果たす役割・機能と役割・機能を発揮するための必要な能力. 岐阜県立看護大学紀要, 14(1), 61-72.
- 河原宣子, 本郷隆浩, 小林奈美 (2014). 家族レジリエンスの概念を用いた研究の動向－わが国の災害看護実践への適用可能性の検討－. 家族看護学研究, 19(2), 114-123.
- 金吉春 (2015). 災害後の中期的支援について. 病院・地域精神医学, 57(3), 236-238.
- 中平洋子, 野嶋佐由美 (2016). 精神障がい者の家族のFamily Resilienceとしての‘Living System力の発現’. 家族看護学研究, 22(1), 2-14.
- 野嶋佐由美, 池添志乃, 井上さや子他 (2018). 災害後における家族レジリエンスを促す7つの看護アプローチ. 高知女子大学看護学会誌, 43(2), 24-36.
- 瀬藤乃理子, 黒川雅代子, 石井千賀子他 (2015). 東日本大震災における「あいまいな喪失」への支援－行方不明者家族への支援の手がかり－. トラウマティック・ストレス, 13(1), 69-77.
- 得津慎子 (2012). 家族の持つ回復する力を信じて. 家族看護学研究, 17(2), 99-104.
- 吉川悟 (1993). 家族療法. 32-39, 京都: ミネルヴァ書房.
- 遊佐安一郎 (1984). 家族療法入門 システムズ・アプローチの理論と実際. 20-29, 東京: 星和書店.
- Zolli, A., Healy, M. (2012) / 須川綾子 (2013). レジリエンス 復活力－あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か－, 20-22, 東京: ダイヤモンド社.